

# 450 関東山地荒川流域の主要変形運動

矢島敏彦 (埼玉大学教育学部)

荒川流域三波川変成岩地域の新期変形運動(中新世以降)は秩父盆地より比企丘陵にかけて分布して来た新オセチ層をこの地域で削削させた。この隆起運動は微小ブロックの差別的な運動よりなる。ブロックの境界は主として6系統の高角度断層群(A: N70°W, B: N10~20°E, C: N10~20°W, D: N40~60°E, E: NS, F: EW~N70°E)よりなる。Aは関東山地方向のもので、野上-西入断層(a), 岩田-小林断層(b)に地溝状となっている。B系統には不動山断層(c), 親皇橋断層(d), 象鼻断層(e), などがある。

C系統は出牛黒谷断層(f), はぐれ朝日根断層(g), 岩田-中郷断層(h), などがあり, 微小断層群のD系統と共に多数の細長い小ブロックを構成する。E系統はもともとも多く, open faultである。F系統には連続性のよいものはあまりないが微小断層群として地形に対応することが多い。その他, 地層りをもたう低角度断層群もある。古期変形運動には新期と同様のものの他に, kin-k-band 各種微褶曲(堆積構造) 各種の傾斜(傾角を含む)の断層群がある。

